

多民族が育む多様なミャンマーの工芸

[ミャンマー伝統工芸調査研究事業から]

城 崎 英 明

1. はじめに

2002年度、アマラプラのサウンダー染織学校から始まった、伝統染織の調査と天然染料による染色技術指導などの支援事業「ミャンマー伝統工芸調査研究事業」は二年目を迎え、パガン漆芸学校や多くの民間の工房も含めた製品開発やデザイン指導など広範囲に広がりを見せる。そこでミャンマーという国の紹介と、得られた知見の一部を記し、ミャンマーの伝統的な工芸をとりまく様々な状況について記しておきたい。

2. ミャンマーとビルマ

この国は我々日本人にはビルマという名称で長く親しまれてきており、ミャンマーという聞き慣れない方が多いだろう。ミャンマー語は文語表現と口語表現の違いが大きく、「ミャンマー」は文語表現であり、「ビルマ」は口語表現である。外国語では口語表現から、「BURMA」や「ビルマ」などの名称が使われてきた。1989年に現在の軍政府は、英語表記による国の名称を「BURMA」から「MYANMAR」に変更、同時に地名や河川の英語による名称も変更。「ラングーン」から「ヤンゴン」に、「イラワジ河」から「エーヤワディー河」に、といった具合である。その結果、ミャンマー人から聞いた地名を地図上で探しても見当たらないことがしばしばある。軍政府は、「BURMA」は総人口の7割を占めるビルマ族を表す名称で、「ミャンマー」は少数民族を含む国全体を表すとす。しかし、「バマー」も「ミャンマー」も語源的には同じで、表現の違いだけと言ってもよいだろう。

3. 多民族国家の成立

西暦のはじめ頃、モン族がシッタン川下流地方に定着、農耕技術やヒンズー教・仏教がインドから伝えられた。一方チベット東北方面から南下した種族(現ビルマ族)が8世紀頃イラワジ川中流域に移住、先住民ピュー族を同化吸収、1044年イラワジ河畔にミャンマー最初の統一パガン王朝を建設した。パガン王朝は上座部仏教を基盤に上ミャンマーを統治、仏教文化は隆盛を極めた。

1287年元の本ビライ・ハーンにパガン王朝が滅ぼされる。その後ビルマ族は、アバ朝、タウング朝などの小国を建て、シャン高原のシャン族、イラワジ河デルタ地方のモン族、ラカイン地方のラカイン族との対立抗争の時代が続く。その後土侯国(藩王国)の時代が長く続くが、1753年ビルマ族のアラウンパー王はマンダレーを首都にコンバウン王朝を樹立、上ミャンマーを統一、南伝仏教文化を繁栄させる。

19世紀イギリスの侵略が本格化、3回のビルマとの戦争によりビルマ王国を滅ぼし、1885年に全土を植民地とした。イギリスは統治にあたりカレン族など少数民族を登用、ビルマ族を排斥。この事が今日の民族問題の原因をつくることになる。ビルマ族の対英独立運動は第一次大戦中に始まり、世界大恐慌以後若い知識層の間に広まった。

ビルマ侵略を狙っていた日本軍は独立運動を利用、ビルマ族と共に英印軍と戦い、ミャンマーを占領する。しかし反日を訴えるアウン・サンら諸政治勢力は大団団結し、反ファシスト人民自由連盟を結成、英・印軍と共に日本軍を撃退した。戦後イギリスとの間に独立協定を締結、1948年に独立した。これにより、イギリスより完全独立を達成し、『ビルマ連邦

社会主義協和国』が発足する。

1988年には大規模な反政府デモが起き各地で暴動が起きるが、国軍が武力で全権を掌握し、『国家法秩序回復評議会 (SLORC) を設置した。翌年の1989年には国名がミャンマーに、首都名がヤンゴンに変更された。

このようにミャンマーの歴史は民族抗争の歴史であり、今日の状況を簡単に言うとビルマ族の軍政府が武力で少数民族の活動を抑制、なんとか安定を保っている状況である。国軍の少数民族への強圧姿勢には問題があり、テロ事件も後を絶たず、いつまた民族間紛争に発展するかわからない状況にある。各民族がお互いを尊重しあい民主的な政治が行われる日を、多くの国民が待ち望んでいる。

4. 多様な自然環境と工芸

ミャンマーの地理的な位置は我々日本人には認識し難いものである。まず、国土のボーダーについて、「南東側はタイに接する」と言うイメージできるが、「東側はラオスに」「北東から北は中国に」「北西はインドに」「西はバングラディッシュに」と言うのと、完全に混乱をきたすであろう。つまり多くの国々とボーダーで接し、しかもそれら多様な文化を包含しているのである。まず東南アジアの文化の変化を東西の軸で観察すると、中国、ベトナムからタイまでは緩やかにグラデーションしていることがわかる、しかしミャンマーの両サイド、タイとインドの文化にはかなりの差異があり、ミャンマーの国土で急激にグラデーションの速度を増している感がある。つまり東からの文化の流れと西からのそれがミャンマーで衝突、融合しているというのが、筆者のイメージである。また同様に南北の軸で観察するとやはりチベットの山岳文化からまったく異なる海洋文化に至るということである。

それら多様な文化のバックボーンとして多様な気候条件について観てみたい。ミャンマーの気候は大雑把に言うると他のインドシナ諸国同様、「暑季」(3～5月)・「雨季」(5～10月)・「乾季」(10～3月)の

スリーシーズンに分けられる。しかし実際には地域差が大きく、複雑で変化に富んでいる。まず国土の北はヒマラヤ山脈の東端に位置し、六千メートル近い万年雪の山岳地帯から始まる。寒冷な高地から温帯、亜熱帯のジャングルへと広がり、年間を通してかなりの雨量がある。雨季には激しい雨のため陸路は寸断され通行不能となる。次に国土の中央まで南下すると、中部ドライゾーンと呼ばれる平原地帯が広がる。この地域は雨季にもほとんど雨は降らず、年間を通して乾燥した地域である。暑気の気温は40数度に達することも珍しくない。しかし雨季には北部山岳地帯で降った大量の雨がイラワジ河の水量を大幅に増し河幅は何倍にも広がり、このドライゾーンを潤す。中部ドライゾーンの東にはシャン高原がある。ここは中国雲南省から続く二千メートル前後の山々からなる広大な森林地帯である。そのほとんどが温帯に属し年間を通して安定した降水量があり、温和な気候である。ドライゾーンの西はインドとの国境地帯に二千から三千メートル近い険しい山々が連なる。年変化においても日変化においても気温差が大きく、いわゆる山岳気候である。中でも南寄りのチン州は、雨季にはインド洋からのモンスーンの影響を直接受けるので、かなりの雨量がある。ドライゾーンの南には標高はチン州ほど高くはないがやはり山岳地帯が続く、この山にぶつかったモンスーンの水蒸気は雨となり、ドライゾーンには乾いた風を吹かせる。この山岳地域をさらに南下するとイラワジ河の広大なデルタ地帯へと続く、この地域は年間を通してベンガル湾からの水蒸気が流れ込み、高温多湿で雨量は非常に多い。さらに南下タニンタリイ半島はアンダマン海沿いに細長い陸地と無数の無人島からなる島嶼地域に至る。このあたりは赤道にも近く熱帯の海洋性気候である。このように北から南まで実にバラエティーに富んだ気候を有する。それら多様な気候条件が多く動物を育み、多様な天然素材を提供してくれる。

4.1 竹

中部ドライゾーンを除く大半の山間地には無尽蔵

とも言われる「竹」が存在する。竹はミャンマーの生活の基盤となる材料である。日常使うバスケット類から漆器の木地、竹紙、建築に至る多くの需要があり、欠くことのできない材料のひとつである。その竹にも数多くの種類があり、太さや節の間隔の異なるもの、肉厚の異なるもの、中心まで詰まったものまで存在する。それらを用途に応じて使い分ける。山間部で採取された竹は筏にして、水量豊富な雨季の河川から各地に供給される。現在藍胎漆器の産地として知られるバガンはドライゾーンにあり、周辺で竹は採取できない、つまり昔から上流域からの竹の流通が存在したことがわかる。そして河沿いには多くの竹の加工を生業とする村々が存在する。竹は成長が早く、地球環境保護の意味からも現在注目される材料である。しかしミャンマー人にとっては、竹の籠より中国製のカラフルなプラスチックの籠のほうが魅力的なようだ。

4.2 漆

東部高原地帯シャン州を中心に多く採取されるものに「漆」がある。漆はミャンマーから雲南、ラオス、ベトナムへと照葉樹林文化のひとつの象徴とも言えるもので、特にシャン州の採取量はかなりのものである。半鎖国状態が半世紀にわたり続いてきたミャンマーでは、ケミカルな塗料より安価で有益な材料である。先述の「竹」に耐久性を与える重要な材料で、箆に塗ることで水汲み容器をつくる。竹の網代の壁や柱に塗ることで建物の耐用年数は飛躍的に永くなる。シャン州のインレー湖で使用される木造の舟は全て漆塗りである。水漏れもなく長持ちする。余談になるが「シャン」というのは日本で言う「シャム」であり、タイを意味する。

4.3 珪化木

かつてピュー族の国が存在した中部ドライゾーンでは、遙か太古の昔この地域が森林であったことを示す多くの珪化木が採取される。この珪化木はピュー時代からビーズの材料として使われてきた。半透明の珪化した部分をビーズの形に削り出し、植物の汁、

石灰などを調合した秘薬で模様を描き、素焼きの壺に入れ長時間焼成すると、白い模様が浮き出した綺麗な赤色の「紅玉髓」が生まれる。現在この技術は廃れつつあり、筆者はかつての綺麗なものを再現するべく調査研究中である。現在バガンの漆器産地ではこの珪化木を砕いて下地漆に混ぜたり、砥石として漆器の磨きに使ったりしている。

4.4 綿花・椰子

中部ドライゾーンでは、灌漑によりイラワジ河流域の水を利用できる地域を除き、そのほとんどが稲作には適さない地域で、そこでは綿花、砂糖椰子が栽培されてきた。綿花は現在でもかなりの量が栽培され、手紡ぎの糸としてまた手織りの綿布に加工されタイなど周辺国に輸出されている。砂糖椰子は名前の通り花序から蜜を採取し砂糖をつくるのと同時に、果実は食用に、また幹は食器やスプーンなど様々な日用品に加工される、有用な植物である。

4.5 マングローブ

バングラディッシュから続くラカイン州の海岸線、イラワジ河の河口デルタ地帯及びさらに南の島嶼域など、ベンガル湾からアンダマン海に続く約3000キロに及ぶ長い海岸線には、多くのマングローブ林が残されている。その面積はインドネシアに次いでアジアでは2番目に広い面積を有する。マングローブは炭や建材に使われる他、タンニン材料として、また染料として古くから日本にも輸出されてきたものである。現地でタンニンを多く含むエキスを抽出、固形物として輸出され、革の鞣や染料として利用されてきた。カテキュー、カッチ、ガンビア、丹穀などいずれもマングローブ類の樹皮などから採取加工されたものである。

5. 信仰の国

ミャンマーは全人口の85%が仏教を信仰する仏教国である。なかでも、ビルマ族、モン族、シャン族はそのほとんどが仏教徒であると言ってもいい。他

には、カレン、カチン、チンなどの山地民族の間に広がり、ビルマ族の中にも若干いるキリスト教徒、インド、バングラディッシュ方面から移入してきたイスラム教徒があげられる。

ミャンマーの仏教は、スリランカ、タイ、カンボジアなどの仏教と同様に南方上座部仏教で、紀元前3世紀の初め頃、モン族により伝えられたのが最初と言わる。その後10～11世紀頃のパガン王朝の隆盛とともに全土に普及した。さらに15, 16世紀頃に、スリランカから僧侶の戒律についての様式が伝えられ、今日まで続くミャンマー上座部仏教の基礎ができたと言われる。パガン王朝時代には国王や王族、遺族の手によって仏塔（パゴダ）や寺院の建立が盛んに行なわれ、パガンには現在も二千を越す仏塔や寺院が残っており、カンボジアのアンコール・ワットやジャワ島のボロブドールとならんで仏教の三大遺跡のひとつに数えられる。しかしながら現軍政府による政情から、世界遺産への指定対象から外されている。

ミャンマーには寺院や仏塔を建て、来世への功德を積むという思想が今も強く残っており、ミャンマー各地で仏塔がいたるところにみられる。また、ビルマ族の社会では、その大多数を占める仏教徒の男子は一生に一度は出家し、得度してお坊さんになり修業しなければならない。これは短い期間でもよく一時的な出家だが、熱心な信者は毎年のように寺で修行する。寺での生活にはとても厳しい戒律がある。子供たちは自分で袈裟を着られるようになると寺に入り数日を過ごす、そこで得られる規律正しい生活は、ミャンマーの生活規範となっている。

また、仏教、キリスト教などが渡来する以前から、人々に信じられてきた精霊（ナツ神）信仰がミャンマーの人々には深く根付いている。このナツの神々は全部で37神があり、その中で仏教の守護神であるタジャーミンナツ（帝釈天）を除くとあとはみな非業の死を遂げた人々の精霊がナツ神として祀られている。中世ミャンマーの仏教国家の建設途上で、国家権力の犠牲になった人たちの霊を祀っている。これら37のナツの神々は沼や川の守護神、村や町の守

護神、また旅の安全を守る道の守護神などの役目をもち、今もなおミャンマー人の日常生活に根をおろし、厚い信仰を集めている。

それら宗教や信仰が工芸品や生活用品のデザインに大きな影響を与えており、例えば漆器類では托鉢や寺院で使用される仏具がその形態の基本となっており、表面に加飾される文様も仏教に由来するものが多い。染織品の文様においても同様に寺院の建築や仏具をかたどったものが多く、いかに宗教が人々の生活に密着しているかを知ることができる。

6. 多彩な民族構成

多民族国家ミャンマーの起源を探ると、中国雲南省やチベット方面からの三度にわたる民族の大移動がその大きな要因として上げられる。全人口の三分の二を占めるビルマ族を中心に、7つの主要少数民族シャン、カチン、カレン、カヤー、ラカイン、チン、モンからなるそれぞれの州、その下にはそれぞれに数十から百近い民族が居住する。ビルマ族はエーヤワディー（イラワジ）河の流域を中心に、アラカン海岸、タニンタリイ海岸等の平野部に居住し、少数民族はその多くが中国、インド、タイ、ラオス、バングラディッシュ等の周辺諸国と国境を接する山岳地帯に居住する。

ミャンマーの民族はそのルーツから大きく三つのグループに分けられる。モンクメール系、チベットビルマ系、タイ中国系の三つである。モンクメール系ルーツにあるのはモン族、カヤー族、ワ族、パラウン族、パダウィン族（首長族）等であり、一方シャン族、カレン族などはタイ中国系である。また、チベットビルマ系にルーツを持つのは、ビルマ族、チン族、カチン族、ラカイン族、ナガー族、ラフ族等である。

これら多くの民族のグループ分けには言語学的に、また民族学的にと諸説あり、今回はミャンマーで一般的な地域での大まかに分類に従った。各民族は独自の伝統的な民族衣装を有し、長い歴史の中で互いに影響しあっている。そのため意匠的にも多様なも

のが存在し離れているのに酷似する事例や、同じグループと思われるが大きく異なる事例など、容易には区別し難い複雑さがある。ここではグループとしての成り立ちや衣装の一般的な特徴を述べるが、これらはごく一部であり、グループ全体の傾向を示すイメージではないことをことわっておく。

6.1 ビルマ族 (Burmese)

主要民族であるビルマ族はビルマ語（ミャンマー語）を話し、北方のゴビ砂漠とチベット東北部の間地、中国の甘粛省辺りから南下してきたとされ、先住のピュー族と混血し、エーヤワディー（イラワジ）河流域に住み着いた。当初は大乗仏教とヒンズー教を信仰していたが、パガン王朝時代にモン族から小乗仏教（上座部仏教）を取り入れ、同時にモン（ブラフマー）文字を導入した。男女ともロンジー（筒状の布、腰巻）を下半身にまとう。女性はタンクトップ、男性はシャツにノーカラーの上着をまとう。男性のロンジーはイギリス統治時代に導入された力織機による木綿のチェック柄が大半を占めるが、正装用のシルクのロンジーには浮織による八重山様の意匠、縫取織、綴織による華やかな意匠も存在する。上着の意匠には中国の影響が色濃い。女性のロンジーにも多様なものが存在し、代表的な産地としてはマンダレーの南にあるアマラプラが有名である。マンダレー王朝、アマラプラ王朝のロイヤルファミリーのデザインを踏襲するアマラプラの華やかな綴織のシルクロンジーは、現在も婚礼用に使われ、ビルマ族の正装には欠かせないものである。

6.2 シャン族 (Shan)

ミャンマーの東部、タイ、ラオスと国境を接するシャン高原の主要民族。タイ語、ラオ語と同系のシャン語を話す。文字はブラフマー文字を応用して使用する。ビルマ語ではシャン族だが、自称はタイ族 (Thai) である。かつてランナー・タイ王国を建設したタイ北の民族と同族である。現在シャン州に居住するのは、タイ・ロン、タイ・マオ、タイ・ヌー、タイ・リェン、タイ・カムティー。シャン州のこと

をムン・タイ（タイ人の国）と呼び、ビルマ人の国はムン・マンと呼ぶ。

女性の民族衣装は、主に中心より横にボタンの付くブラウスにロンジー（腰巻）。男性は白いシャツに茶色（南シャン）または灰色（北シャン）の上着とズボン。タイ北部では現在は少なくなった伝統的な衣装が残る。ミャンマーでもっとも多くの民族が存在するシャン州には、衣装においても実に多様なものが存在し、明確に区別するのは至難の業である。概してそれらは中国の影響が強い意匠である。

6.3 カレン族 (Kayin)

下ミャンマー地域の主要民族の一つである。カレン族はエーヤワディー（イラワジ）河のデルタ地帯を中心に、タイ国境のカレン州にかけて、ビルマ族と混在する。最も多く居住するのはエーヤワディー（イラワジ）管区であり、カレン州ではない。カレン族はイギリス植民地時代に下級官吏として登用され、かなりのカレン族がキリスト教に改宗した。平地に住むカレン族の85%は仏教徒で、山岳居住のカレン族はキリスト教徒が多い。

言語はカレン語を話す、多くの方言がある。平地居住のカレン族はスゴー、ポーの2大方言を話す、山岳ではそれ以外の方言も使われている。

民族衣装は、一般に既婚女性はカラフルな刺繍を施した丈の短い貫頭衣、未婚女性は白地でやや丈の長い貫頭衣にロンジーをまとう。この貫頭衣の意匠はカレン族の支族であるカヤー族の一部のものと酷似しており、またルーツは異なるであろうチン族のものにも類似する。

特にまとまった産地はなく、山間部の小さな村々で村ごとにあるいはグループごとに異なった意匠が見られる。その多くは家族や村内だけの自給のためのものである。

近年ビルマ軍から逃れタイ側に移住した多くのカレン族には、天然染料による染織や銀細工などタイ市場で高い評価を受けているグループもある。

近年タイ国境近くでのビルマ軍（国軍）によるカレン族への迫害は国際的にも問題視されており、強

制移住、強制労働など、多くの事例がネット上で報告されている。

6.4 ラカイン族 (Rakhine)

ラカイン (アラカン) 州に居住するビルマ族の支族。ラカイン族は自らをバンマージー (偉大なビルマ族) と表現する。伝説によれば紀元4世紀から独自の王国を築き、18世紀にビルマ族のマハバンドーラ将軍に征服されるまで独立を保っていた。言語はラカイン語を話す。民族衣装はビルマ族とほとんど同化類似しているが婚礼などセレモニー用の衣装には独特のものが存在する。概してバングラディッシュ、インドなど西からの影響が濃い。

6.5 モン族 (Mon)

下ミャンマー地域に勢力を有していた、ミャンマー最古の民族と言われる。ミャンマー人が、モン・カマー (モン・クメール族) と表現するように、カンボジアのクメール族と同系であり、言語的にも類似すると言われる。紀元前よりタトンを中心として、インドとの交易を行い、ブラフマー文字 (現在ビルマ文字の原形) を導入し、高度な文明を有していたとされる。現在はビルマ族との混血が進み、その言葉や文化が失われつつある。現在の人口は160万人だが、モン語を母語とする住民の数は50万人程度だとされる。服装や風俗の面では、ラカインと同様にビルマ族と同化しており現在ではビルマ族と大きな違いは見られない。

モン族は現在のカンボジアのように、もともと高度の染織技術を継承していたが、タイ族の南下とともに東西に分断され、ミャンマーのモン族はビルマ族に同化吸収されたものと考えられる。

6.6 チン族 (Chin) とナガー族 (Naga)

インドとの国境、チン高原を中心に、インドとミャンマーにまたがって居住する高地民族である。近年まで未開発で地形も険しいため、方言の分化が著しく、チン州だけで40以上の方言が話されている。19世紀以降行われた宣教師の活動によってキリスト教

に改宗した者もいるが、全体の約7割は無宗教 (あるいは精霊崇拜) だと言われている。

チン族は森林を伐採して焼畑耕作を営むが、平地に降りて水田耕作に従事するようになった者もいる。山間僻地で暮らす女性の間では、顔に入墨を施す風習が今でも残っている。

チン州の北サガイン管区、インドのナガーランドとの国境地帯に居住するナガー族には、近代まで首狩の風習が残り、多くの日本兵の首が狩られた由である。衣装は近代まで禪ひとつのほとんど裸族で、朝晩や寒い時季には犬や山羊の毛で織られたブランケットを羽織る。現在の染織の産地としては、チン州とサガイン管区の境にあり平地民サラインが多く暮らすカレーミョーがあげられる。手織りのチンの伝統的な精細な意匠のものや、腰機で織られるナガーのボリュームあるブランケットの意匠は美しく、現在タイに多く輸出されている。またインド側の町ではインド人から糸などの材料の供給を受け、インド向けに織っているところが多い。

6.7 カチン族 (Kachin)

ミャンマーの最北部ヒマラヤ東端の雲南省と国境で接するカチン州の主要民族。中国では景頗と呼ばれ、ジンポー語でウンポンである。言語グループとしてはジンポー族 (全体の5割以上)、マルー族 (自称はロンウォー)、ラシー族、アズイー族、ヌン族 (自称はアロンミ)、ラワン族、リス族の7つに分類されるが、相互に血縁関係を結び、混血が進んでいる。平地に住む住民は、アメリカのパプティスト派の活動により、キリスト教に改宗が進む。山間地のジンポー族は精霊崇拜を行っている。言語学的にはチベットビルマ語族に属する。

主な女性の民族衣装は、黒地に緑色の飾りの付いたブラウスと赤地のスカートにレギングスを着用。男性のロンジーは黒と緑と紫のチェックでカチンロンジーとして有名である。山羊の毛を使った赤色地に縫取織や浮織で織り出される模様には、美しい幾何文様が多くラオスのそれと共通点が見られる。またその生地で作ったカラフルなカチンバッグは

ミャンマー全域で人気がある。

産地としては州都のミチナー周辺に手織りの小さな工房が点在するが、まとまった産地はなく、山間の小さな村で自給のために細々と織られている。村毎に特徴ある意匠のものが母から娘へと受け継がれていく。

6.8 カヤー族 (Kayah or Karenni)

ミャンマーの東部カヤー州に住む人口10万人程度のグループである。民族的名称はカレン・ニー(赤カレン)で、約十種の言語集団が存在し、その中の一つは、近年日本で首長族として知られているパダウイン族である。パダウインはカレン族の支族とする説と、モン・クメール系に属するとする説があるが、カヤー族でひとまとめにすることに無理があるのかもしれない。

歴史的には、かつてタイ系のユアン族の土候が支配していたが、カレン・ニー族は反乱によりユアン族を追い出す。1835年イギリスは、カレン・ニーと友好関係を結び、1857年に州西部の独立承認とビルマ族の侵入禁止条約を締結した。1889年にイギリスは州の東部を軍事占領し、1948年にはミャンマー連邦下の一州として独立した。

一般に女性の民族衣装は、赤いタンクトップに腰巻、マントを着用する。男性は赤と緑のストライプの入ったロンジーをまとう。その他多様な民族衣装が存在する。この地域は今もビルマ軍との内戦やテロが多発し、外国人の入域は厳しく制限されている。

7. 照葉樹林と工芸材料

次に、日本文化の基層が存在するとし、近年注目される「照葉樹林文化」という視点から、ミャンマーの工芸を観てみたい。

7.1 手漉き紙

まず照葉樹林文化を象徴する代表的な技術として、カジノキ類の樹皮を用いた手漉き紙の技術がある。カジノキ (*Broussonetia papyrifera* Vent.) は中国の雲

南、広西地区、ラオス、ミャンマー、そしてタイ北、カンボア、ベトナムに広く自生している。

日本では古くから和紙原料としてコウゾ (*Broussonetia kazinoki* Sieb.) が用いられてきたが、広い意味ではコウゾのなかにカジノキも含めている。両者は植物学的にもよく類似しており、英名では両者を Papermulberry といっている。

日本の和紙業界が現在原料として使うコウゾは約8割がタイからの輸入カジノキである。そのタイも現在ではラオスからの輸入に頼っている。

シャン州のピンダヤで取材した紙漉きの技法は、ラオスのルアンプラバン周辺で行われるものと酷似し、一連の文化圏であることがわかる。現在紙漉きの全ての工程を手作業で行っているのは、東南アジアでも最貧といわれるミャンマーやラオスの極一部の地域に限られる。

7.2 ウルシと漆工芸

漆の木は、日本だけではなく、中国大陆、朝鮮半島、台湾、ベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー等、広く照葉樹林文化圏の地域に繁茂している。ウルシ科に属する植物は、この地球上に500種以上あるといわれているが、そのうち漆が採取できるのは数種でアジアに集中している。漆の樹は、中国西南部の雲南省、あるいは長江上流域の四川省の南方あたりが原産ではないかとされる。日本の漆は移入されたものと思われてきたが、実は照葉樹林帯が成立する以前から日本列島に自生していたという見方もある。現在漆器を生産する地域はベトナム、タイからミャンマーにかけての地域、ブータン南部などとされる。

ベトナムの漆は、アンナン(安南)漆と呼ばれ、日本にも古くから入っていたようである。日本や中国の漆とも、またタイ、ミャンマーのものとも異なる性質を有し、透明度が非常に高く、彩漆を練って作るのに適している。弾力性にも富み、籃胎漆器にも向いている。ベトナムの漆器は、食器類、調度類、家具類のほかに漆画(パネル)が有名。

ミャンマーの漆樹は、ほぼ全国各地にみることが

できるが、漆液の生産地は、主にミャンマー東北部のシャン高原である。この漆はゴム質が多く粘りが強く、竹による素地の籃胎漆器には都合のよいものである。日本でも有名な伝統的な漆芸技法である「蒟醬（キンマ）」は、伝統的アジアの生活習慣のひとつである嘸みタバコ（キンマの葉に石灰乳を塗り、ピンロウジの種、香辛料を包む）をつくる道具や材料を収納する漆塗りの箱がルーツで、ミャンマーでは近年まで嫁入り道具のひとつであり、地方では女性も嗜むものである。この「キンマ」という植物の名称が日本に伝わり、その漆塗りの収納箱に施されていた漆芸技法の名称に変化して伝わったのである。現在嘸みタバコは「コーン」と呼ばれる。

籃胎漆器に使用される竹はイラワジ河上流に位置するカチン州、サガイン州方面で採れる竹が良いとされ、筏に組んでマンダレー、パガンに送られてくる。支流のチンドウィン河流域でとれる良質の竹は節の間が1 m 以上もある。

タイ北部、チェンマイ市ラッケン村は、ランナーの時代から籃胎漆器を作り続けている。漆は現在、大半をミャンマーから輸入。ランナー・アユタヤ時代につくられたタイの漆芸の装飾は、金箔や銀箔を用いて文様を表わす箔絵や、線彫り文様の中に色漆を埋めて研ぎだす蒟醬で、バンコク朝時代には貝を使う螺鈿も盛んにおこなわれた。しかし現在タイでの漆器の生産は少なくなり、それら多彩な加飾技法を一堂に観ることができるのはミャンマーのみであろう。

ラオスでは、花模様の線彫りに金箔や銀箔を埋めた沈金・沈銀の漆器を17～20世紀にかけて生産していたが、現在は生産していない。

このように照葉樹林文化圏は太古から带状につながっているが、紙漉きも漆器の生産も衰退への道をたどっており、その影には安価なプラスチック製品の氾濫、近代化による人件費の高騰など、近代化がもたらした様々な問題が存在する。

7.3 養蚕

養蚕もまた照葉樹林文化のひとつの象徴である。

絹は古代から中国の重要な交易品であった。そして東南アジア照葉樹林帯全域で絹織物が生産されてきた。しかし今日化学繊維、合成繊維の流通により、その生産量は極端に落ち込んでいる。タイ人はレーヨンガラスの絹と称して好んで使用するし、ミャンマーにおいても、レーヨンやポリエステル需要は急激に上昇、養蚕産業は斜陽の傾向にある。さらに中国から安価な生糸が輸入されるようになり、国産の絹糸はほとんど見られなくなってしまった。ラオス、カンボジアでは近年再び在来種の養蚕が行われるようになり、金色の繭など脚光を浴びるようになってはいるが、生産量は少ない。

仏教の敬虔な信者が多い東南アジアでは、蚕を殺す生糸の生産は嫌われ、蚕が成虫になり繭から出た後の穴明きの繭を使用するため、基本的に紬が中心である。

8. アマラプラの工芸

マンダレーの南にアマラプラという王朝がかつて存在した。この小さなアマラプラという町は現在も様々な工芸の産地である。日本の京都や金沢に多くの工芸技術が残されるように、ここアマラプラにも多様な技術が残されている。王朝の調度品から建築に至るあらゆるものを造るために、職人たちは庇護されてきたものと思われる。余談であるが「マンダレー」の語源は「曼陀羅」であり、王朝の仏教への依存度の高さを感じさせる。

8.1 染織

アマラプラの染織は全国的にも有名で、その産地をとりまとめる存在として、国立のサウンダー染織学校がある。ミャンマー全土には14の国立の染織学校があり、サウンダーはその中心的存在である。この学校はイギリス統治時代にサウンダーというイギリス人によって創設され、百年近い歴史を有する。かつてミャンマーの染織技術が近代化される時期、この学校は大変な人気で、入学希望者は100倍以上の倍率であった。現在ジャガードの織機、捺染台など

もメンテナンスできなくなり埃を被っている。しかし、近年は天然染料の染色に熱心に取り組み、ミャンマー国内はもとより海外でも有名になり、海外からのオーダーも増加しつつある。産地アマラプラ全体としても、天然染料に取り組む工房が増えており、廃水処理施設などが無い現状において、また世界的な自然志向においてよい方向を模索するものと、我々のプロジェクトでも推進している。

同時にアマラプラはアマラプラ王朝、マンダレー王朝の時代からの伝統的なロイヤルファミリーのデザインを守り続けてきた所で、現在も婚礼用の高級な衣装から、普段着のロンジーまで幅広い需要があり、学校の周辺には数多くの民間の染織工房が存在する産地である。

8.2 木彫

ミャンマー全土の王宮や寺院の建築を特徴づける豪華な木彫の装飾は、その多くがここアマラプラで生産される。イラワジ河から大量に荷揚げされるチーク材を中心に、様々な木材を使用し、レリーフや透かし彫りの流れるような優美な伝統模様が今日まで受け継がれる。時代ごとに変遷する模様には実に多くのバリエーションがあり、寺院の修理などでも、時代考証に基づき、その建立された時代にあわせた模様が施される。

各工房で代々受け継がれてきた伝統の技であるが、近年建築装飾の需要は少なくなり、大半の工房ではお土産用の額縁や室内装飾用の小物類、家具などを生産する。

8.3 仏像

仏像造りではまず鑄造によるものがあげられる。焼型重ね吹きによる本格的な大型仏像、蠟型による等身大のものから梵鐘など各種仏具の製造まで、かなり大きな鑄造工房が何軒も存在する。

また、大理石の石造仏も造られており、艶やかで真っ白な仏像は涼しげでミャンマー独特の雰囲気醸し出す。また寺院の床などに使うタイルなど建築材への加工もおこなわれる。これら製造された仏像

や仏具などは、ミャンマー国内はもとより、中国をはじめ、アジア各国からの注文によるものである。

8.4 銀細工

銀細工の工房はアマラプラからイラワジ河を渡った対岸のサガインの街にある。もとは寺院建築の装飾金具や仏具の製造から始まり、現在は彫鍛金の技を生かして、装身具を中心に室内装飾品など様々なものが製造されている。ミャンマーには各少数民族にも独特の銀細工のアクセサリ類があるが、ここサガインで行われているものは、特に繊細で王朝時代の意匠のものや、イギリス統治時代の影響を残すものと考えられる。

8.5 漆器

アマラプラの南にかつてインワ王朝が存在したインワの街がある。ここは托鉢用の漆塗鉢の産地である。一時的にせよこの国のほとんどの仏教徒は出家するわけで、この鉢の需要は相当なものと思われされる。現在この鉢の胎はドラム缶など廃物から切り出した鉄板を叩出してつくる、まさしく鉄鉢である。

下地の加工や塗りの技術は現在のパガンと同様であるが、この鉢の製造だけを専門に行っている。

9. パガンの漆工芸

パガンは漆器の産地として有名だが、その生産量も相当なものである。街自体は小さな田舎町だが、居住するほとんど人々が漆器生産に関わっていると言ってもよいだろう。

パガン王朝時代に建立された寺院やパゴダの数は2400余りを数え、そこに納められてきた木心乾漆の仏像造りや籃胎による仏具の生産には相当数の職人が関わってきたに違いない。

現在ほとんどの工房がお土産用の食器類を中心に製造しているが、伝統的な仏具や仏像の製作や家具などをヨーロッパ各国に輸出している工房もある。

パガンの漆器はいわゆる籃胎漆器で、木地を竹でつくる。その方法は籠状に編んでいくもの、竹を薄

く削りコイル状に巻いてつくるぶなこ様の方法、また特殊なものとして馬の尻尾の毛を織り込んでつくるものなどが伝統的におこなわれており、木材からの挽きものや削りものも近年増えつつある。

加飾技法では繊細な線彫り後色漆で着色する蒨醬技法、アラビアゴム系の樹液で模様を描き箔押し後樹液を流し去る箔絵技法、骨灰を漆でこねた粘土状のものでつくるレリーフ技法など、その他近年は日本からの技術移入で変わり塗りなどもおこなわれている。

10. インレー湖の染織

シャン州はインレー湖で水上生活を営むインタ族は様々な工芸品を生産している。多くの村と多くの寺院、ここでも仏教と工芸は深く関わっている。

水上に建てられた染織工房は大小相当数あり、動力織機こそないが、手織りの織機を数十台から数百台有し、かなりの規模である。現在中国から輸入された生糸を使い、カラフルな緯絁を中心に、緻密な浮織や縫取のはいった繊細なオーガンジーなどが織られている。これらはお土産として工房内のショップで販売されるほか、ヤンゴンやタイからのオーダーも相当数ある。

またこの伝統的な織物に蓮の繊維を使った蓮布がある。昔から寺に僧衣として寄進するために織られてきたもので、蓮の茎からの繊維の引き出し、紡ぎ、撚り、織りへとたいへんな手間を要するものである。宗教的な意味から、また珍しさから近年海外への需要が生まれつつある。

染織のほかにも多様な工芸が存在するが、それらは次の機会に記したい。

11. 最後に

この事業を通して、筆者は常にミャンマーの進むべき方向について考え続けてきた。今後政治は民主化への道をたどるであろうことは予想されるが、市場開放と同時に急激に流入してくるであろう海外資

本に対して、どのような対応ができるのか、現在のミャンマーには不安定要素が多い。

豊富な天然資源と安価な労働力の切り売り、さらには貧富の格差の拡大、といった状況になるであろうことは必至である。近代化され、国民の一部は経済的にも豊かになるかもしれないが、そこで失われるものは大きいだろう。

半鎖国状態のこの半世紀、決して良い状況だったとは言えないが、皮肉にも手つかずで残された豊かな自然環境、動力を使わない手工芸の技、ものの不足から考え出されたエコロジーな生活の知恵、それらは確実に失われていく。これまで培われてきた仏教信仰に支えられた豊かなアジアの精神性、貧しいけれど明るく屈託のない子供たちの笑顔に、豊かさとは何かを先進国に問い掛けたいと思う。今先進国は大量生産大量消費の時代から、新たな価値観の創出を模索している。そのひとつの答えを、ここミャンマーに見出すことができるように感じるのは私だけだろうか。

我々の活動の指針として、工芸の振興を通してこの国が、また東南アジアの国々がこれまでにない形で、真の豊かさとは何なのかを問いかけ、先進国の人々に新たな生活の豊かさについて提案できればと考える。

参考文献

ビルマ史

G.E. ハーヴェイ著／大江專一訳／東亜研究所
知られざるビルマ

大野徹著／芙蓉書房

ビルマ仏教・その歴史と儀礼・信仰

池田正隆著／法蔵館

ビルマ仏教・その実態と修行

生野善応著／大蔵出版

ミャンマーの経済改革と開放政策

西澤信善著／勁草書房

アジアのうるし・日本の漆

大西長利著／東京美術

事典・東南アジア 風土・生態・環境

京都大学東南アジア研究センター編／弘文堂

マングローブ入門

中村武久／中須賀常雄／(株)めこん

緑の冒険

向後元彦／岩波書店

熱帯雨林をまもる

環境庁熱帯雨林保護検討会／日本放送出版協会

(きざき・ひであき 工芸材料・染織)

(2003年10月31日受理)